

東光が記した“八尾のブラシ”～小説 河内風土記 から～



▲今東光、ブラシ工場訪問(昭和35年頃 撮影:田中幸太郎)



▲当時市内に多くみられた、ブラシ工場(昭和39年)

東光と今回ご紹介する「八尾のブラシ」との関係、唐突なようにおもえますが、東光は創作した作品中に、ブラシに関する記述をたびたび登場させており、製造工場を訪問したり、当時の八尾のブラシを紹介した「^{ブラシ}刷子名鑑」に「刷子談義」を寄稿したりと、八尾のブラシ産業を応援していたことがうかがわれます。

檀家ははじめ八尾の人々と交流するなかで、東光は多くの八尾の事柄を知りました。往時は全国に名を知られた河内木綿や、隆盛を誇っていたブラシといった、「産業」もそのひとつでした。

東光が八尾の人々の生活を描いた代表的作品として、「小説河内風土記」があります。全6巻中、63もの短編が所収されていますが、その作品中には、ブラシ関係者も多く登場します。

そして、そういった人々を軸に様々な人間模様が描かれます。そこへ補足的に、ブラシにまつわる話が——時に、小説の「すじ」から離れていくのではと思われるほど詳細に——記されます。

…隣近所の小倅達も立派な稼ぎ人だった。この土地では小学校を卒業間近かの年頃になると、もう家業の手伝いをさせられる。彼らは毛殖えから、木地の磨きから、塗りから、とそれぞれ^{ブラシ}刷子造りを覚えさせられる。従って子供にしては沢山の小遣いを貰うわけだ。(小説河内風土記 巻之一「河内勘定」より)

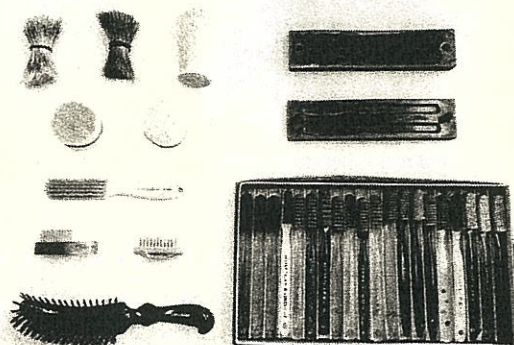
…おえんは手を休めもしないで、挨拶した。エプロンをかけ、机のような毛揃えの台で、ばらばらになった豚毛を、とんとんと音立てて揃えていた。時折^{しんちゅう}真鍮の櫛で毛をしごいては、長短を整え、ゴムのバンドで一束にするのだ。それが実に素速く整理されてゆくのだ。(小説河内風土記 巻之三「あすの風」より)

この河内の郷土講義のような一節は、東光の「河内もの」と呼ばれる作品群のなかにたびたび見られますが、それは河内のことを書き留めたかった東光にとってみれば、自然なことだったのかもしれない。

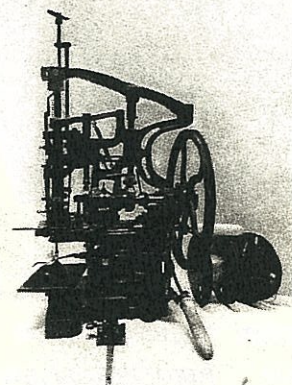
東光が記した「八尾のブラシ」の世界をご覧頂き、当時のまちや人々の様子に思いを馳せて頂ければ幸いです。



▲歯ブラシ工場の製造風景(昭和35年頃 撮影:田中幸太郎)



▲ブラシの材料と、八尾でつくられたブラシの数々(昭和20～30年代製)



▲八尾で開発された、^{かみや}嘉宮式植毛機(昭和30年代製)

(次回企画展示は、平成28年秋に開催予定です)